

まえがき 6

1…JFK 7

2…ダイアナとの出会い 12

3…チャールズ 36

4…危険な情事 55

5…オリバー・ホア 74

6…最愛の息子たち 92

7…離婚 104

8…ドレス売却 124

9…もう一度恋に落ちて 138

10…信仰 161

11…より美しく 177

12…家庭の事情 188

13…チャリテイ 206

14…フェアギー 222

15…勇気ある行動 233

16…宮殿をとりまく人びと 248

17…最後の夏 267

18…終焉 279

訳者あとがき 284

まえがき

ダイアナは、いくつもの役割を同時に演じることのできる女性でした。相手によつては立場が重複することもありましたが、心の中では、いつも役割を区別し、うまく演じているようでした。彼女は常にプリンセスで、また同時に母であり、恋する女であり、時にはタフな慈善活動家でした。

ダイアナは私の親友で、隠し事や言い訳をせず、少女のようになんでも語り合いました。女性ならだれでも考えるすべてを語りました。そして、「シモーヌ、もし私に何かあったら、真実を語って」といつも言っていました。

だから、私は、この本を書くことにしたのです。



I……JFK

空を見上げる仕草、晴れやかなその笑顔、ときおり見せる涙、うつとりするような魅力、そして慈善活動家でもあるダイアナの心の奥には秘められた情熱があった。

彼女は愛されたかった。そして、それ以上に愛したかった。貧しい人びとや恵まれない人びと、そして愛する息子たちウイリアムとハリー、夫のチャールズ。彼がダイアナの情熱的な愛を受けとめてくれるような人物だったらよかったのに。彼女はただロマンティックな愛が欲しかったのだ。

ダイアナは、よく自分のことを話してくれたので、私は彼女のことをよく知っているつもりだ。床に座ったり、ベッドやソファに腰かけながら、あるいはキッチンで、テイクアウトのイタリア料理やレンジで温めるだけの料理と一緒に食べながら、またはハーブティーを何杯も飲みながら、何時間でも語り合った。それは、彼女の願いや興味のあること、あるいは恋愛のことについてだった。隠し事なんていっさいなかった。ダイアナはとても率直で感情が豊かだったので、興味のあることから夢中になった男性のことまで、すべて包み隠さず話してくれた。

ある日、いつものように二人で話していると、自然と話題がジョン・F・ケネディ・ジュニアとロマンスの話になった。それは初耳だった。私たちは、ケンジントン宮殿のリビングにいて、ダイアナはとても履き心地のよさそうなベージュのショートブーツにジーンズ、上質なカシミヤのVネックセーターを着ていた。